信じられる話であらうと思ひます。かういうことは小供がだん〳〵長じて來ますと、なに之れはわるい事をさせまい方便として、わざとこしらへたものであるといふことは、わかつて來ますけれども、しかも之れがわかつたからといふて、別に本誌第九號に載せられた高木先生の所謂母の言葉的見下げたつまらぬやうな考へは起きて來ないのです。之れは私が子供のときを追想していふのでありますから果してあたつて居るか否かはわかりませぬが、かういふところをうまく子どもに呑み込ましたなら確かに之れは小兒教育上尠なからざる功驗があらうと信じて居ります

（未完）

母と子と繼母

林　壽祐

天高く地廣く萬物多しといへども、母程戀しく慕しく尊く親切なるは無く子程愛らしく樂しく賴ましきものは無し。假令母が嚴しくあらうとも子が魯鈍であらうとも、其愛情は離なすも離れず切ても切れず、彼の夫婦の情合親しきとか朋友の信義厚しとかいふと雖も、もと〳〵骨肉わけての緣故に非らざれば、其親密の度到底も母子の情に及ぶべからず、吾人は深く信ず無形的の親和力に於ては母子の情に比するもの無しと。

夫れ造化の意匠たる、生物を繁殖せしむるに數多の幼稚を數多の母に養育せしむる時は、甚だ不穩且つ不利益なるを以て、各自に已れの產みたる子を保護養成せしむるの性情を賦與したるものな

るべし。故に獨り人類のみに止まらず獅子、虎、熊の如き猛惡なるものより、鳩燕の如き可憐なるものに至るまで、其子を愛するは皆同一徹にして、已れの產みたる子を顧みざる者は特に例外者と看做すべきなり。母は其子を愛するの餘りみすゝ已れの生命を犧牲に供することあり。西洋の或る婦人一日氷雪の上を旅行し、寒氣强烈肌を裂き血液不循當に息絕へなんとするに際し、猶其子を思ふて已まず遂に已れの衣を脫ぎ其子を纏ひ堅く抱きしめながら敢へなく最期を遂げたるが、其子は爲めに救出さるゝを得たり。また狼及び熊の母親がいかに其子の殺害されしを見、且つ怒り且つ悲み遂に憤死せしか海豹の如きは常に子を抱き激浪の中に游泳し、獵夫に追はれ、遠く奔馳するときも離すことなく、海獺海驢は其子銃殺せられんか、性來怯懦なるに拘らず獵船めがけて慕ひ來たり無慘にも銃丸に倒れまた鯨の如きは一朝其子を失ふ時は大音を發して悲鳴すといふ。禽類にあつても燒野の雉子夜の鶴、若し兒童等が鷹或は鳶の雛を獲んとする時は親鳥は奮然勇氣を鼓し飛來つて兒童の頭を打ち以て之を逐拂はんとす、黃道眉、雀の如き小弱なるものは巢に手を觸るゝを見れば、前後左右に狂ひ廻はり其雛を持去るや、哀聲を出し遠く追尾するものなり。人類より下禽獸にいたるまで母が子を愛するは誠意誠心より出で其間に一點の疊なし。噫美なる哉。

諸孃靜思一番、試に往事を顧みよ。吾人が母の胎內を出でし頃は如何なるものなりしか、軟きこと綿の如く弱きこと卵の如く苟も、荒々しくせんか直に破碎せんとす、併も亦實に不潔にして噪がし

さ厄介者として他人をして傍に居るさへ眉をひそめしむることありき。然るに母は如何潔癖であらうとも更に厭なく手ら不淨を拭ひ、或は夜半に醒めては手搜りして寒暑を氣づかひ只管子の養育に餘念なし。それ婦人の性たる概ね柔和にして動もすれば顏を紅くし或は物事に遠慮する者なれども子生るゝに及べば些細なる事など遠慮するの猶餘なきにいたるを以てやゝ大膽となるなり。而して其子にして少く生長すれば、翫弄物を與へ或は已は食はざるも子に飽かしめ、寒暑に應じて衣服を整へ、我儘言ふも怒らず、遊出して會々遲く還れば河沼に墜落せしには非らざるか、途を迷ひ違ひしに非らざるか、負傷せるには非らざるかと、思はぬ事にまで氣をもみ若し病痾に罹れば日夜看護怠らず、一日も速く快愈せんことを祈り、已れは粗服を纏ひながらも子には乏しき財布をたゝきても成るべく見苦しからぬ樣にと苦心し一喜一憂常に我子と共にし、また年長けて他鄕に遊學するに至れば、第一に衣服に心を注ぎ冬は寒からぬ樣に思切りて綿を入れ、夏は凌ぎ易からん樣輕快の品を撰び能く勉强せよ、而し疾病にかゝらぬ樣注意せよ、無益に金錢を費すな、而し困る事あれば速に通知せよ、土用休みは幾日なるや、正月休は何頃なるや、且つ說き且つ問ひ學費も定めし餘分を要するならんと潛に紙包を出だし、其出發するに及んでは數日間心は共に他鄕にさまよひ、寒さにつけても熱さにつけても我子を思ひ、書信いたれば先づ安否如何にと打案んじ、休暇を以て歸れば彼是と勞はり、試驗と聞けば便りに任せて滋養品を贈り學成り業終れば本人に倍して喜びそれより

人の婿となり嫁となるまで先から先と思ひ惱み全く一家の主人となり主婦となるまで子故の暗に迷ふ親心。天性（義務か）とはいふものゝ如何に嚴肅に如何に溫愛に如何に周到なるか。

飜つて等しく此社會に生息する同胞を顧みよ、冷淡、無情、貪慾、姦獰、譎詐、猜疑、嫉妬を以て充たされたる浮世の中に矛とも楯とも賴むべき母に後れたる憐れの子女を觀よ。母に後れたる子女は恰もそれ親鷄に離れし雛、他の牝鷄便りてかけよればすげなく打ちつゝかるゝのみ、何處に向つて哺まれんとするか同じく親なれども父の情は母の如く暖かならず、假令父に叱からるゝも母さへあれば傍よりなだめくれらるものを、母なくては誰れか涙を拭ひくれるぞ。母なき子こそ憐れなるはなけれ。

余は母なし子に就き潛に注意するに、衣服裂けやうとも下駄の鼻緒切れやうとも足袋に穴が出來やうとも、母あるものゝ如く繕ふてあるもの少し。殊に女子にありては衣服、化粧、裝飾等により容易に母の有無を知るを得べし。何となれば母親生存する時は化粧、着樣につき注意周密なるも、母なし子は隅より隅まで顧るものなきを以て、自然裝飾等に欠點あるものなり。また母なし子は何れも淋しき相貌なるが如し、それも道理、例へば夏の永き日など遊び疲かれて家に還れば母は第一深く其勞を慰め自ら足を洗ふやら、蒲團を敷くやら蚊帳をつるやら、彼是と手を盡さるゝものが、母なし子は如何、概ねこそ〳〵と下駄を携へ自ら冷水にて足を洗らひ頭から看物でも被ぶり、シホ〳〵となりて眠らねばならず、又無情なる蚊は容

赦なく憐れの者を刺廻はり、小き腕と足は時々ビク〳〵と震へ、爲めに生寢にて醒むるも母なければ悲嘆ることも出來ず、再び縮こまりて眠るなり他の小供が飴或は菓子を買ふに、母なし子は往々指を含へてたゞ見居ることあり、他の小供は母に連れられ物見に行くも唯羨みながら之を見送ることとあり。かゝる憐むべき地位にある子女に對して唯に冷淡なるのみならず、一般に之を侮り、はては下婢下僕に至るまで之を馬鹿にするの風あり。嗚呼外に出でゝは世人及び同輩に輕蔑せられ、內に入つては語り慰むるものなし、恰も木より落ちにし猿のごと。是れ自然つれなき狀態を呈する所以なり。さてまた母なし子の慟哭は普通兒童が啼叫するとはやゝ異り、悲哀叫咽につぐに大息を以てし、流れ出づる涙及び啼哭後の相貌は一種言ふに言はれぬ悲みを含めり。あア頗是なき小頭にも既に人世のあぢきなき事を感ずるにや。而して世間には子を持てる者、即ち既に已に愛情に富みたる婦女が、親ある子には其親に諂諛ひ、深く愛敬の意を表するも、親なき子には憚る所なきを以て常に之を疎んずるものあり、言語同斷ア、無情もまた甚だしひ哉。

（つゞく）